

Inches

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



友棟婦女八景徳七編
下

へ13
2913
23



0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

JAPAN

TAMBA

2913
23

昭和九年六月六日
陸軍省

貞操婦女八賢誌

村田

東都 為永春水編次

第四十五回

逃水の郷の娼婦姦夫を誘ふ
國府の原の一兇二賊を欺く

東路のありとりのるる逃水の逃るくは世をさぐるるる
世の世を知る歌うや淡き浮世は住らねて身を逃水の
此里の浮るる家造りも都路のしき一構槍板の托
茅の根庭の白砂羨しく梅の散るも野櫻の時
顔の八重一重二重の垣も見へ透て花の香渡る

文賢五輯の三

〇一

枝折戸の内や床しき丸琴の誰がよむぞさきり増うら
聲きえ音きえ最妙の将標し居る折とをり門廻
徨い一個の葎僧をむし一團惚居らうらが思ひけん
勢へ来し尺八せ稍取り直し調ぶる琴小音を副へて
最面白く吹きまきひ其琴とのひ笛とのひまき春若ま
黄鳥の谷の門出て梅の啼く夫の増甘し微妙の一
曲艶る限り調ぶ内少の琴の音をまきめて卒の内に
まわらせんと言ひつ庭下秋履履らう枝折戸開て
立出る丸音よりも猶妙なる北才なるの一個の弱女

鏡のやうの磨きたる最清らうなる塗折あに色しるの因
うち来せて含咲らうさう出を處女の顔と薦僧が
ほくぐ見り忽地め思ひかけみし鳥羽玉さぬ何松七
這所めと言ひりけらる那弱女のうち抜き俺に持し
塗折あに半面移し薦僧の顔うちさぬ又作天然う
言ふお前の香場うら有女さぬに在るぬうと言ふあ薦僧
支頭うらゆも吾侪の有女太郎許さぬ人と言ひりも四迎
見まらう天蓋小面をせうけ取退まきま前髪的美ゆ年
夫と見るより鳥羽玉のいと嬉しげふうち咲て絶て久しき

香場かばより先まづく這方こちへと引袖ひきそでをひるさうらふうち微笑わらわ不覺ふかく
たる夏なつ為なのゆるみお前の当所あたところに在あるに泳およき仔細しじゆのあつ
へさぬ私わがの心こころも中なかつに憚おどろつものと言いふと烏羽玉うはたま听きひんぞ其その出で
介意まじり入いらぬこと伴ともひ今日けふの主ぬしも苗守なえもり隣となりに遠とほき孤屋ひとりや
他ほかの人目ひとめの関せまもさへ互たがひの積つみる身みのうゑなるも一室ひとむろへ
顔かほくとの暮くれ近ちかき花吹雪はなぶき色香いろかほを込こめて曳袖ひきそでの佐野さのの
こころの雪ゆきさうらでさきとぐふ振ふりも拂はらひさざりて休やすみ阿容あはら
阿容あはらと胸むねも轉ころく飛石とこいしを傳つたへ救すくひのらふ垣実かきみとを繕つくらぬ
数冬あまふゆの花珠はなたまらうと山藤やまふぢの紫むらさの色いろめくらまきて操まもの松まつも

色替いろかる庭にわの千種ちかたを打うちらぐも奥室おくむろさうて性しやうやどふ烏羽玉うはたま
うう咲さく氣けは自らみづから薄茶うすちやを立たててせし款待けんたい態たいに
有女ありむすめ太郎たうらうの身みさへ公こうも落おちつゑて侶りやうみ咲さく座ざを志しのこむ
烏羽玉うはたまの身みを我われまを男おとこの顔かほを恥はぢらう氣けは見みて見みぬ
旅たびの伎わざも赤あからむ顔かほをうち俺おれひ別わかれ一日いちにちより丸まる
一年いちねんささぬくし憂うれ夏なつの言ことの葉草はぐさの露つゆあひく物格ものかく
らんも恥はぢらうし此身こゝろのうゑの先まづ置おけてお前まへのゆるる情由こころゆゑ有あり
憚おどろる姿すがたの為ためのふぞ听きせぬと問とひ寄よるがうち克う頭づみはく
有女ありむすめ太郎たうらう四辺よへ見みえし声こゑ竊ひそまをせお前まへも問とひきて箇この振ふり

箇族と言ふも面々此身の隆行主君の側妾とあるも
迷ふ心の中をさく人目忍ぶの椽先の戦吹東風を夜風と
思ふ首尾も宵月夜心の丈を自が名の梅に寄て入て
通へせ一言話の花も咲ぬ間ぬま濡中ぬ濡衣を此
身ぬ何う如月の其次の日の鎌倉なる館の中を遊ひ拂り
詮術も武藏なる浮世忍ぶの岳近き日暮と
片里ぬ落着ぬ身を落きて一稔ひまり暮と
理ぬ迫りて是非もお袖とひる處女と害し開里ぬ
住居もろりぬて夫より斯る姿とあり這所ぬ一日那処ぬ

二日環て今日此里でお目ぬるも尽せぬ山家史ぬ付ても
お前ぬま奈ゆる沢で鎌倉を去りて此里に住ぬ
所以とをひると同ひ返さぬ鳥羽王の稍泪ぐ目元を
袖ぬ七打掩ひお前の活脱ぬ就てま思ひ出せぬ去給ぬ
春身ぬおへる濡衣ぬお前ぬ暇私ぬま館ぬ
中ぬ困居らぬ絶て一夜も召さぬ形勢を听けぬ
縁てより那意地悪の奥さぬが妬心ぬの添まよりぬ
前と私を殿さぬへある支るぬの支換言して遊ひ失んと
為ぬよ聞ぬ心も易らぬ奈ゆるやせんと種ぬ獨

心を苦しめてもまご詮術もつらうが縁に私の母さんの
稲村が崎の隠居して真間の愛嬉と喚きつる履き初
栗さぬのお色顔もまご他増え先稲村が崎へ安を
きつる一輝如此くおとせしうぶ母さんもまご私父のあく
思按せぬぐらうしても左の右の氣色和らぎのつとふと
暹も放さざれば猶も一間の籠居て枕淋しき獨寐の
爰と暮ゆく九一年憂とこほりる其中の荷てかへて
去る夜にお亀とりて一人の舞子親の敵と喚びるひそ
悲しや私の母さんとせ只一刺ぬ刺殺し行来も知らざりし

うぶ夫と落度ぬ私まを了に館と退の拂は行へま家も
わら浪や身の浮草の寄辺なく乾くぬ袖の濡まする泪の
雨や古郷の下総の國真間の荘と知つて居れど年久
あく絶て音信も聞ざれば此の知己のありとそも今猶彼
地におりやわらや開を知らしめぬども他に行き方も
かく倘此辺の長居して館の人み出會て顔見さん取
くうさふ公細くも只獨り移まば替る星月夜滌倉山を後
か一花を見捨て行空の馬もななくも北へ向く洲ね旅
森の夜を明し其次の日の武藏の國分も程も遠くぬ



女
人
の
世
の
世



浄
薄
の
男
女
あ
ら
び
春
と
湯
り

荒野とまらる折とをひき日西山の果ては暗き黄
昏とき左右の茂草高草の動く風うと思ふ間ひ
つと出らる二個の僻の私せ中へ捕縛て見らるさへ怖き目
見開き嬢公よ余のそな狭きと此頃の間の又まへ這辺の幾
日立暮しても鏝一文の仕支もく美味酒さへ吞さるし今
日へのつらる吉日にせ生辨天の影向とら此うあもるき二個が
焼俵兼の十九り十八の答めひらむ散もせぬ今を盛りの上婦
女怪我させぬやう引らむが。合点と二個と私を捕り
足を捕り央の抱へて行んとせし後ろの現ふ一名の武士僻者

俟つと声くけらる二個の狭き見久しうが相ひの一名と
侮りけん冷笑ひつ行んとまを件の武士が引止め。ヤレ
僕て大哥相談ひり嚮る形勢と現ふは畏れぬけらる
其娘子金とくらむと積りうらんが這方も望みの年
恰好酒價で俺們ふことさまざやと思ひがけるも武士の
言活み呆る兇賊ども顔うらむらめて居らるし流石の
白者些とも強がむ然うおらまて詮方がねらる程
你的度量通り大金のまら此婦女酒價ぐらひで取られ
ちやア這方の腮が養うらまぬ此相談へマア止サト振切る

文賢五輯の三

袖とまゝ引とめ。コレ慾張る大哥達其方の金にまゝ氣
でも退隊のころ此處女夫とも知らばうらうらと此近辺を連
歩き備その退隊の目み掛らば婦女を失ふの事かゞ品
寄らう二個が身のうゑ危ふい克と為ちうらう酒價で俺
度して呉色毛やど口を酸くしとも四の五の言や是非が
本もと出して斯うまゝト躲し持つる早繩十の二個が
目先へ突付まゝの事か強氣の僻者も此一言の威をひ
が色尻とともあくや思ひけん私を其終棄置て後をう
まゝ外は度とまゝと見るより武士の冷笑ひう懐より

是持行けと言ひさして投出と金の一包救へ何程も
浪や然い引まゝと兇賊へも速く金を受取らば何処
ともまゝ逃ゆくと迹見おらうて武士の私の側へ我々
何國のお人々知らねども難美の場呀と見まゝいぬ口
出次第言ひまゝ一悪兒どもを欺りて些少の金でお前の
身を術よく這方へ取戻せばモウ怖い克へる見れば
お連もろい松子殊にお前の髪風俗此辺の人の
と見まゝ何野うらう何野へ行んとてまゝうらう身
ひらめて此野中へ来のひーと回つて言話の憑一と

隠る此身の為多しと思按せしう形容を正し何國
のり方さるやほいし一田見もせぬ私と結まを隣を
金まを出しと賜へし一お禮の言話み尽さ且び私
古郷へ下総より真間の莊へ聞き切少時より鎌
倉より去るお館の給仕しと此年月を送りし一お朋輩
流の極言めて思ひがけりま身のお暇両親もみ世を
去て他にお寄辺へゆらねども古郷を去り下総へとむき
は来る途めせくる難美の折もお貴公のお蔭で湯と
危い場所を免るし一お恩のりつる忘るべき猶此うあのに慈

悲し宿る方まで私を送り届け下まりませと涙
らぬを合せしおの武士うち貞頭听べ听りと痛ま
重ねし一落命今言ひし一お相遠なく下総とても悪
あま親族ゆりと言ふし一お假令古郷を去りて落つ
先も定めしお行んとする途中め又のや難美のゆらん
知るび開せしおるる處女の身で一個那地へ行く危
俺們が家の武藏より逃水といふ片里めて當時浪人の身の
うあまはと慈と家名へ名告ぬども些の時金のもあまは
お前ひよりを幾百日養ひ置とも苦し一且俺家へ

伴のゆき便宜を待ちて下総へ入して送り参りて是れ
倍する夏はつるまじく這義のつるまじく老實一氣の同
る言結のさし當る此身の為とおのふにぞ左め右め
宜しくと言ふふ件の侍士の最咲一氣と炎頭
其終此家へ誘つて一日二日とつるめぞ初めの言結め
引替へて女房めつるまじく无理相續とつるまじく當
惑の思按も更ぬ出づるを忍義の加ぬつるまじく
さぬ子誥の難題又詮術もつるまじく了に公の従ふて
氣にの深ねど是非も今日しと這里の暮をさる

薄く形勢をささり見るふ此家のつるまじく其とどめ多
塚村の知縣めて戸塚大六といふものつるまじく不良との
つるまじく鎌倉よりして討隊を對つるまじく捕捕を
爲つるまじく奸智の園一六六の女速くも那地を夜走
あて像て莊夫の油とあつり貯へて金銀めて這所め
竊うふ家居を構へ送く富貴の暮せむも多塚村へ
遠くつるまじく名を悼りて他の語らむと介つるまじく過
日ふ私が難美を救はんとして常に放さぬ早繩と十の
出して僻者をつるまじく金のめて追ひ走らせ私をさる欺て

這里こゝ六伴むつぱんひ来りき一ひとと一伍いちご一什いちじの物語ものがたりりふ春はるの日ひ
うううう稍暮しやうぼて自おのが名な小喚せうわんふ鳥羽玉うとまの甲夜かよひの間まううううま
薄暗うすぢやうの火ひとも一頃ひとごころゆゆととりふりふるる

毒計吹入どくけいふきい々い外面美人うへめんびじん

奸智受得けんちうけとくうう變生女子へんじやうしよ

第四十六回

有あ右みぎ一ひとりひとりひとふ鳥羽玉うとまの四下よしたを見みわわうううう咲さててととのの掩おほりり
鈍どんままくくも余あまりり咄はなししふ実じつぶ入いりりと暗くらくくるるののももううもも忘われ
燈あかともともさぬさぬののももううはは夕ゆふ饌ぜんををささええままららせせねねはは味あじ物もの欲ほく
在あるるままぐぐ一ひと今日けふのの折せよくよく主ぬしも在あるる病びやうにに下女げにょも下男げなんも出で拂はらふ

なまなまべべ其その呀や乎やふふ介かい意いののああららねねどもども庵あん厨ちゆう働はたらききままるるもの
ああららねねばばのの款待くわんたいののここ心こゝろぬぬはは甚しだだ奈なららややせんせんとと言いひひりりも
ちちをを引ひ止とめめ有あるる女にょ太た郎らうのの含くわ笑せうみみらら鳥羽玉うとまささるる思おもひひががひ
ららままのの目め見み積つりりくくくくおお話わ説せをを所まくくごごふふ此こゝ身みののささいいりりのの
ああてて日ひ頃ころのの憂うれをを晴はせせししふふおおんん款待くわんたいぬぬ及およんんやや主ぬしのの飯いりりのの
ううままううららふふ卒そつおお暇ひまとと身みをを起おこことと鳥羽玉うとまささるるああらら禁かんんぬ
最さい限げんぬぬ氣きささううちち見みたりりそそのの情なさけみみらら有あるる女にょ太た郎らうささるる別わかれ
ままるる日ひよりより九く一じつ年ねん小せう鹿ろくのの角つののの束たばのの間まもも忘われれぬぬおお前まへのの
今日けふ這里こゝででおお目めのの掛かるる優う曇どん華げのの春はる侍まじりりるる公こう地ち

あて歡んで居るものを此俤別きて行んと人の意中も
吸知らぬ最も強顔きそのお言話公ばよまの良君の思ふ
豫て知りまがらお前と私の過世より添き縁一のあま
みや互ひの思ひあひのきて誘ふ嵐め吹くびく柳の糸の
早晚よりう乱れ深み胸と胸逢ふ夜もあくて疑ひ
なろうき別れ後河なる富士の高根の盡雪の積る思ひ
解ちて音めを鳴れ夏虫の獨りあぐり狗の火を
前の猶も余呀々々々他人がまふお泪が私に口惜い眼
ゆふの思ひの犬をうき口祝き身を背けり傍る行健

速く取出しうらまを附木の灯火に有女太郎のつぐと
烏羽玉の類うちらり其お怒るの余夏るが私とせも
前より館の心氣をそとらめてお照りけり程なれば余は
換ても今一度お前み逢ふて是も思ひつらる赤心を
知らせんものと神へ誓ひし甲斐に今日這所でお目
くく嬉しき飛ぶらやう思へども最前うらの他
話流し思ふくまは是非なくも大六どの入るあひを
法作うらの良夫のあつ内身とあがりけり放かこと這所
長居をまらうらる猶も主の飯らまら私らうらお前

まを又疑ひを身ぬうけて争何る難美のあらんも
おまを強面言ひしん只是のそらるるば眼んで下さまる
斯う言ふうちも公急迫を放してと振り拂ふ袖をとり
へて烏羽玉が須臾思按の体ありしが思ひけん打定頭
ありやどお前の仕作とり主が飯くらぶ互ひの身のうゑ
まの言へ折角回會此終本意なく別是ての是まをあのひ
思ひまを憂年月の甲斐もな一假令不美でも邪淫
でも姦の思按の他とやらお前のむいおらねども逢はる
思按いこそ斯うと耳の口寄せ叫び始終を聞て有女

太郎の依然とてうち含咲今にとりめぬ智恵才覚
お前のおしゆあまごめて日くらむぞ此家へ入り込んで
積るおりの其折しうらむぞ俟て在せよと言ひり
おまを身を起こすと烏羽玉見り嬉し氣は侶の笑は
見送れば余波惜まも弥増る有女太郎のうらまを
心をひとり取り直し思ひも深き編笠の顔を隠し枝
折戸を以前来一方を出行ける

嗚呼 這二個が浮薄の本心形容の艶ハ一まみ
似ても似つぬ邪智奸才伎倆一夏のその圖み当り

一旦本意を遂るも豈天罰を被らざらんや是
れを思ふ世の中の形容の美たるとのを真の美
人とのいへば假令容貌ハ醜くとも悪ま心の
一毫もくハ美男ともまさに美女とも言ひまん況て
公と容色と双方とも美しく夫とを真の美人
身へ今本傳ハ出るとらの八賢女ハ此の
如し看官鳥羽王有女太郎と八賢女子の美悪
を公ハ入らく誑判て身と謹むの一助ともを
作者の本意此とあやらる事

閑話休題爰ハまに戸塚大六ハ喬の多塚村を夜遊と
同國入郡邊水の里ハ居を構へ思ひけぎも鳥
羽王ハ難美の場所を救ひけ俺家ハ伴ハ来りも鳥
渠ハ色香ハ公迷ハ推て夫婦となり一基ハ鳥ハ好の
白痴ハ只ハ酒ハの春の日ハ短ハ思ふにぞ
弥生ハ夢と暮ハゆきて垣の花雪と散る如月旬ハ
なり一自由ハ聞く郭公酒屋ハ三里豆腐ハ二里
こそハけは片里の鄙ハ大六ハ身ハ金ハ多ハ
けは目ハ青葉見るの心ハ初松莫口ハ入る不美



富貴の樂しきを極むる中此やどよりうの鳥羽玉が
 其外のみまこのや一個の處女を得しぬ渠の糸竹の道は
 舞の心さても怯るわづらひよく與せど倍みける什麼
 此處女の故ぬ大六が家の養つてや是が仔細を察する
 頃も肆月の初旬花の衣を脱更て袂涼しきなら給南
 向の小二階ぬ今日掛そあり青芦の裡ぬ主の大六が
 例の鳥羽玉侶俱に獻り酬まら置酒の折しも門の
 枝折扉をひのきしげぬ推開て息吹ひぞ並込む未
 通女泪の姿とあり立て私の旅の者ありが今思漢の
 出會しを泣くもの場を逃延て此所まをまらるる者
 お慈悲と思し召しおこまけりて下さるまをせと言を
 打聴く下女奴婢の仰く立發ぎ主の恚と報知
 むぞ大六の二階より先りの處女の形勢を見らぬ幸の
 破瓦を多くも超ぎ容貌の艶いさへ俺慾目で刃
 鳥羽玉の倍とのまきど劣らねば色ぬ目のるま大六の
 公中竊うふよるこがら軈て二階へ喚び登せ仔細
 發らと問はせむ件の未通女の氣入先大六と
 鳥羽玉の一礼のみり儲りぬ私ガ古郷へ下総多

文賢五輯の三

真間とゆふ 田舎にて爺さんの世にあり一日の真
間一郷を支配して家名も古奈の三郎とて人に
知らしむ郷士より身み過ちのあつふより私が丁
度五才のとき管領さぬの心下知めて家も郎も召上られ
私の乳母のよきとけりて義理ある一個の母さんと異母の
姉さん別きて武藏へ侍りて親子の縁も最善に墨
田川原一程近き高屋の里に落着て憂年月を送る
はも只恋しい母と姉に困ふ忍びて在るうと思ひ出
まぬ日ともなかく泣いてむらり暮せし程徑て風ふ

形勢と受けの母さんもまご姉さんも管領さぬへ身を
倚せて今の鎌倉に在るより只夫のそめあつて
母さんの名と愛嬉といふさ稲村が崎に居あさ賜
るのそり姉さんの定正さぬの愛妾となり名も烏羽玉
と時ゆくより听く小嬉しく懐く飛立やふあひ人
ども田舎育ちの悲しみの賤の多業の其他に知れぬ此
身を阿容くいと妹と名告て鎌倉へ行く互ひの恥を
と思ふ心を乳母も語り夫より左辺右辺聞合せ師匠
たるべき人せしめと糸竹の道読書まを怯まむに習ひ

得し冬左も右にも這春の絶て久き母さんや及
 妙さん名告會俺身のうなをも憑さんと樂しむ甲
 斐も情や去稔の冬より乳母が大病他は親族をも
 なく私づつさるひとらで公を法くまを看病も其詮もと
 春もや弥生旬の花と散る八十八夜夫らで乳母は此
 世を別と霜俱み消さし此身を公を公を取り直し夫
 より乳母が死骸を烟りとりて薪焚る鎌倉へととく
 心で遥けき路次を只獨り索ね行し那所中も思ひ
 がけるまき大變ありと母さんい人もふりて迹へ残り妙さん
 爰身の世服を賜へりて今も行兼もおぼざるより听み
 胸まらふさうり七乾りぬ袖ぬ又濡る涙の絶間亡人の
 迹吊いん方もかく只妙さんい田會便りところん貫んと
 思ふ公の一筋の鎌倉の地を立出て索ぬる当りゆねども
 古郷のまき下総へ倘行のまき支のやとそらるまきを憑
 比七東をさすて辿るゆを習ひぬ途に踏迷ひ下総へとてい
 行どし七名も所かぬ此里へ迷ひく来て来し程の思ひゆけ
 なく悪漢に出會て難美ぬ及びしを漸くとして逃延び
 け爰のお家を見らよりも嬉しきまふ後前の思按も

なくて泣き泣きを其終遊のも放さまじびぬ二階へまを
 喚ひげらるゝ斯く念頃な言話の親身ふ念この地
 きて公の思入秘言まを依のうくくと口たりの身のうを
 話一の最長まを傍痛くや思ひらんか許容るまを
 下まらませと言ふは駭く大六より傍聞ま一鳥羽玉の
 我む小藤と侶俱は鞠く拘を推まらも楮の依の別ま一あり
 絶て信をばまぎり一妹のお有女でゆり一とまると言ひきて
 處女は又駛ま呆々まをな鳥羽玉が頼うらるゝと居らるひる
 貞操婦女八賢誌七編下

村田

抄
 八賢

